

平成27年度「ステップアップカリキュラム研究開発推進事業」成果報告

1 研究主題

地域と共に歩む学校の幅広い学力と幅広い進路目標を持った生徒に対応したキャリア教育を利用し、義務教育段階の基礎学力と社会的基礎学力の定着を研究する。

2 研究主題設定の理由

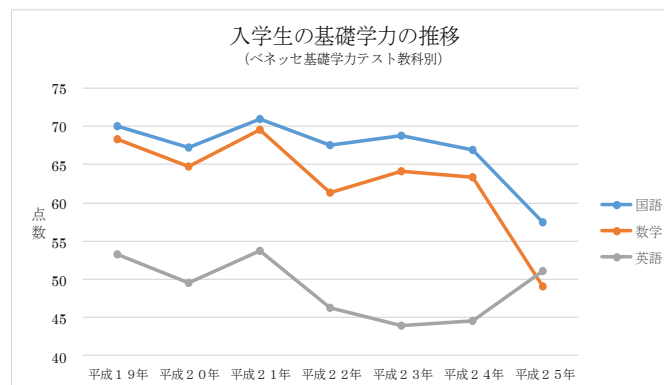
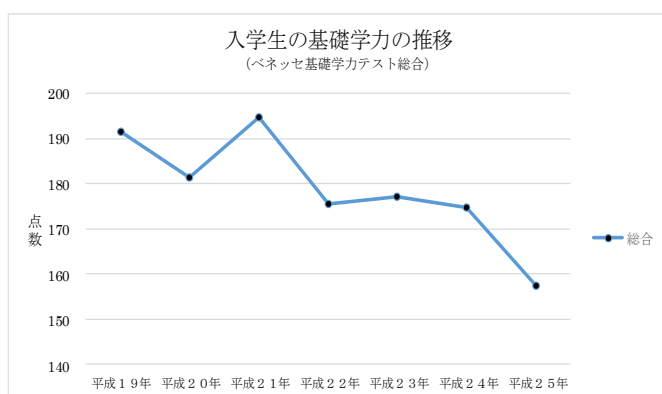
恵那南高校は地元の生徒が通う学校として幅広い学力層の生徒を受け入れている。しかし、地域的に少子化が進み、生徒数は年々減少してきている。地元から期待される高校であるためには幅広い学力をもった生徒たちに対応し、進路意識を高め、社会で活躍できる人材を育成しなくてはならない。

そこで、総合学科の特長であるキャリア教育を活用し自己表現力豊かな生徒を育てたいと考えている。「ステップアップカリキュラム研究開発」(SUC)としては、「義務教育段階での基礎学力の定着と向上」、「社会的基礎力の定着」の研究開発を目標にしたい。

3 平成25年度の取り組み

(1) 基礎学力診断テスト(㈱ベネッセコーポレーション)の実施

入学生の学力把握と今後の変化をみるために、基礎学力診断テストを実施した。



(2) 合同会議の開催

学校支援訪問時に各教科に対して課題が提示されSUCとして取り組みを始めた。その課題解決のために、国語・数学・英語の3教科の合同教科会議を開催し、習熟度別授業の具体的な到達基準を示すことを計画した。

(3) 学び直し教材「マナトレ」(ベネッセコーポレーション)の取り組み(数学と国語の授業で実施)

数学は2年次「数学活用」で実施し、就職試験に活用できる力を身につけることを目標にして授業開始から15分程度で実施し解説してから授業に入った。1年次で取り入れることも検討したが2年次の方が時間を十分とることができ系列に分かれた授業のため目的意識が高まり取り組みやすいと考えたためである。

国語も2年次「現代文」で実施した。授業開始の15分程度で自学課題として実施した。

(4) 「産業社会と人間」での取り組み

学び直しをいつ実施するかという問題について、1年次の「産業社会と人間」の授業の中で実施する提案がなされた。しかし、「産業社会と人間」は、それまで確立した授業計画があり、その計画に学び直しを盛りこむ余裕がなかった。そこで、1年次学年団を中心に「産業社会と人間」の授業計画を再考した。

(5) 学校設定科目「ソーシャルスキル」

SUC事業を受ける前に平成27年度から3年次生のカリキュラムで自由選択群の中に学校設定科目「ソーシャルスキル」開講し、数学・商業の面から基礎学力向上を目標とした授業計画していたが、SUCの取り組みをこの授業で実施できるように改善した。

「ソーシャルスキル」をAとBに分け、「ソーシャルスキルA」は新聞や各種ニュースソースを利用してディベート、パネルディスカッションなどの手法を学習し社会の情報を入手するとともに就職試験の面接などにつなげ、「ソーシャルスキルB」は算数・数学の計算領域の復習を行い、割合の概念や単位の換算、推理や命題などの論理的思考力を身につけ、また、ビジネスに必要な売買・損益の基本的な計算能力も身につけることを検討した。

(6) キャリアコーディネーターによる外部評価

厚労省指定キャリア・コンサルタントCDAの資格を持つ外部の方にキャリアコーディネーターをお願いした。

面談により、生徒個々の基礎学力に対するつまずき度が浮き彫りになり、職員や生徒の基礎学力の課題を具体化させることができた。

(7) 校内研修による職員の共通理解

基礎学力に対する職員の意識や生徒自身の意識を調査することにした。調査結果より、生徒達はおおむね、自分の学力について客観的に見ることができており、習熟度別授業や学び直すことについて前向きな回答をしているが、家庭では携帯電話やスマートフォンの使用で学習ができていないという結果になった。学校で学習を行う事の重要性や家庭学習への具体的なアプローチが必要であることが分かった。また、教員への調査では習熟度別授業への認識度が低いことから、共通理解のためにも到達基準の明瞭化が必要であることが分かった。さらに、生徒は義務教育段階の基礎学力に対して危機感を持っており、基礎学力向上への取り組みに対しては前向きであったことから、教員の共通認識と協調した取り組みを作る必要性が確認された。

4 平成26年度の取り組み

(1) 「産業社会と人間」での取り組み

1年次の「産業社会と人間」で、進路目標を考えるために必要な基礎力を身につけるカリキュラムを研究した。平成25年度の授業計画の再考したことを実施した。基礎学力を高める取り組みを入れた計画は、今までの計画や目標達成を半減してしまい、「産業社会と人間」の授業の中だけでは基礎学力とキャリア教育を推進しきれない状況になった。そこで2年次3年次の「総合的な学習の時間」につなげて3年間の期間の中で体系的に基礎学力とキャリア教育を一体化して推進する計画を検討した。そして学校設定科目「ソーシャルスキル」の科目を1年次生で実施して、基礎学力の時間を十分に確保することとした。

(2) 学校設定科目「ソーシャルスキル」の検討

ソーシャルスキルで身に付ける力を前年度に引き続き検討し、学校設定科目のカリキュラムを作成した。ソーシャルスキルで身に付ける力を次の通り設定した。

＜ソーシャルスキルに含まれる能力＞

- ①意思決定能力 ②問題解決能力
 ③創造力豊かな思考 ④クリティカルに考えていく能力
 ⑤効果的なコミュニケーション能力
 ⑥対人関係スキル（自己開示、質問する能力、聴くこと）
 ⑦自己意識 ⑧共感性
 ⑨情動への対処 ⑩ストレスへの対処

平成27年度に実施する「ソーシャルスキルA」は、平成26年度3年次生の就職希望者から8月に新聞をニュースソースとして用いた「時事討論」を行い、就職試験の面接などに繋げるなど具体的に研究をした。

1年次生で実施する科目 α と β は年間1単位、後期から実施することでカリキュラムに組み入れた。「ソーシャルスキル α 」はビジネス系列簿記モデルを系列選択した生徒に「簿記の基礎」を実施し、「ソーシャルスキル β 」は進学系列とビジネス系列簿記モデル以外を選択した生徒に「基礎学力の学び直し」を実施し、進学系列は「数学A」を後期4単位で実施して「ソーシャルスキル」は実施しないことにした。

1年次生前期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
国語総合				数学I				化学基礎				現代社会		体育		保健	芸術		英語I OCI			家庭総合		社会と情報		産業人間		L H R	

1年次生後期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
国語総合				数学I		数学A（進学）				化学基礎		現代社会		体育		保健	芸術		英語I OCI			家庭総合		社会と情報		産業人間		L H R	
						数学A		ソシ ヤル ス キ ル $\alpha \cdot \beta$																					

(3) キャリアコーディネーターによる外部評価

外部のキャリアコーディネーターの面談を継続して実施した。そしてその面談を通して生徒の客観的な分析した。

入学生の実態把握と1年間のキャリア教育の成果の評価を行った。

第1回面談の評価と課題

- ・コースによる学習内容を理解していない。
- ・職業レディネステストの意義・結果を理解していない。
- ・就職希望者に具体的なイメージがない。
- ・入退室の仕方が分からない。
- ・得意・不得意なことがいえない。

第2回面談の評価

- ・コースの学習内容理解について完全ではないが徐々に進んでいる。
- ・夏休みの課題「職業インタビュー」や中学で行った職場体験が経験として定着していない。
- ・前回に比べると面談態度は落ち着き、しっかりと挨拶や話ができている。

5 平成27年度の取り組み

(1) 「キャリアノート」の原案作成

1年次生の後期から「ソーシャルスキル」を実施することで系列選択を前期に行う必要があり、大幅な「産業社会と人間」のカリキュラムの変更と2・3年次の「総合的学習の時間」で継続しながらキャリア教育をより一貫性にさせるため「産業社会と人間」の授業だけでなく、3年間のガイドブックとなる「キャリアノート」を作成した。

(2) 「ソーシャルスキル」のシラバスおよび年間指導計画と教材研究

「ソーシャルスキルA・B・α・β」のシラバスおよび年間指導計画を作成した。教材に関しては今年度担当教諭が中心となり、教務部と進路指導部の合同で教材を研究し作成した。来年度以降、担当する教科、教員をどうしていくのが課題である。

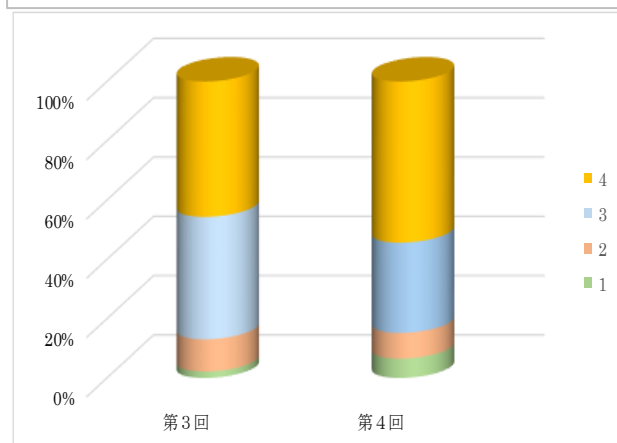
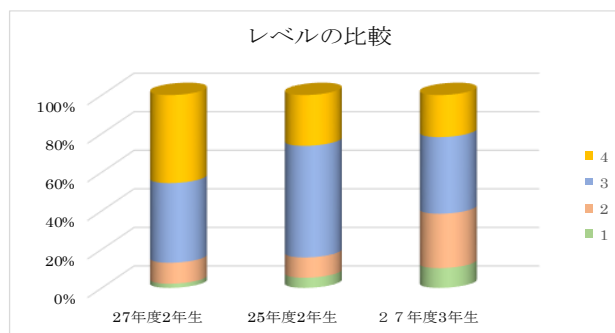
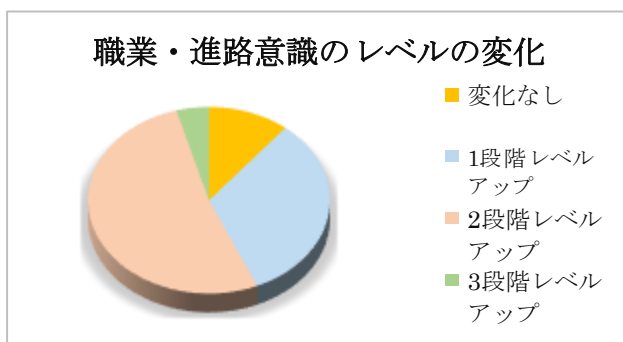
(3) キャリアコーディネーターによる外部評価

キャリアコーディネーターの面談を2年次生でも継続して実施し、外部評価による進路指導をした。

① キャリア面談の経過と成果

- ・3回の面談による職業・進路に対する意識の変化

その結果、46人中、レベルの変化がなかった生徒5人(11%)、1段階アップは15人(33%)、2段階アップは24人(52%)、3段階アップは2人(4%)であった。



・第4回の結果

職業・進路意識はレベル1が3人(6%)、2は4人(8%)、3は14人(30%)、4が25人(54%)で、1年次から明確な目標を持っていた生徒で迷いを感じている生徒は若干増えた。

しかし、進路についての理解が深まった結果としての、別の選択肢を視野に入れた前向きな迷いであり、2年次レベルでは当然だと思われる。

② 問題点

面談に真剣に取り組まない生徒も若干(2人ほど)増加。そうした生徒が入ったグループでは全体にレベルが下がり、グループ面談の意義が感じられなかった。小規模校で生徒間のつながりが強いメリットはあるが、前向きな緊張感が感じられず、社会性は低い傾向にあることがわかった。

<各レベルの基準>

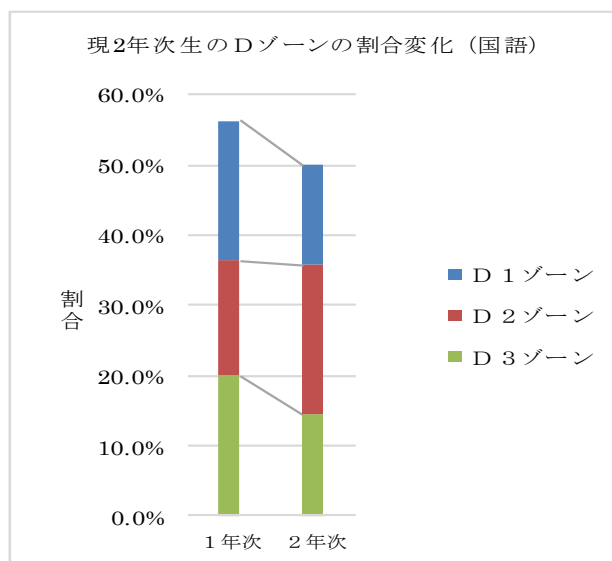
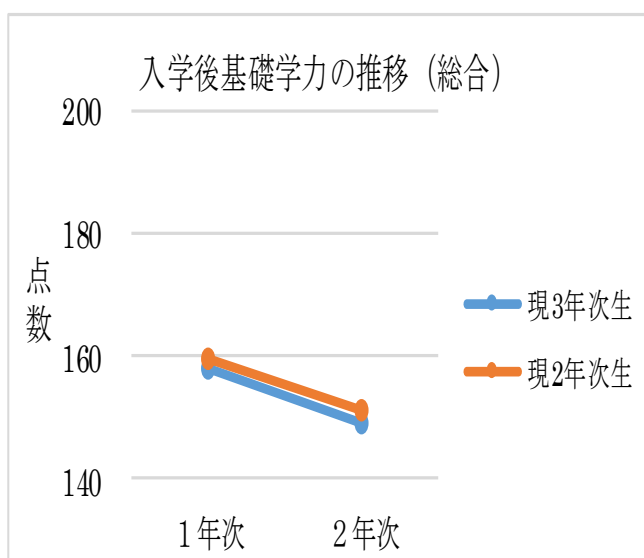
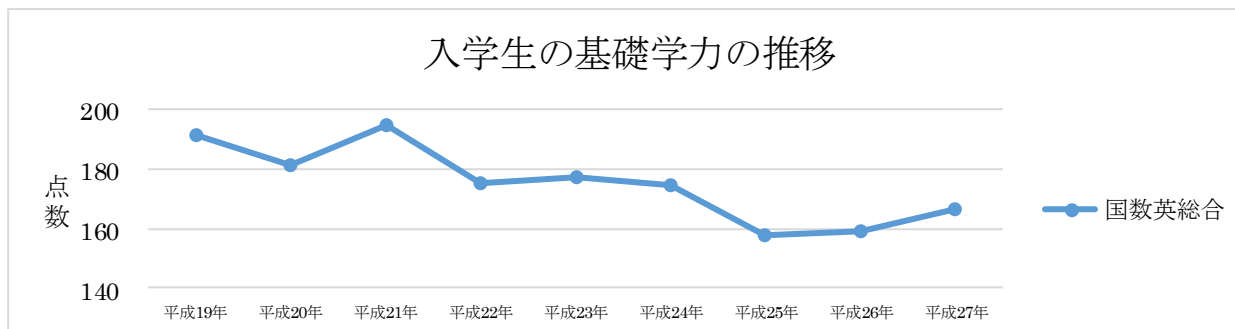
- レベル1・・・就職・進学、希望する業種・職種、学部や将来の職業などがすべて未定。
 レベル2・・・就職・進学が決まっている。
 レベル3・・・就職の場合は希望業種・職種が言える。進学では志望学部（学科）が言える。
 レベル4・・・志望企業名、志望校名等が具体的に言える。

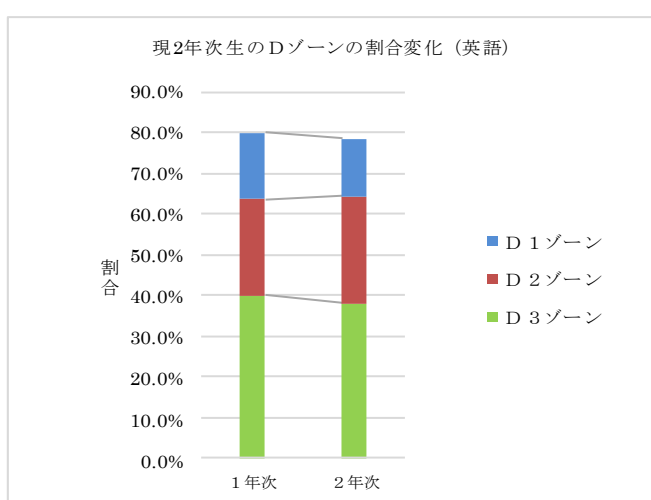
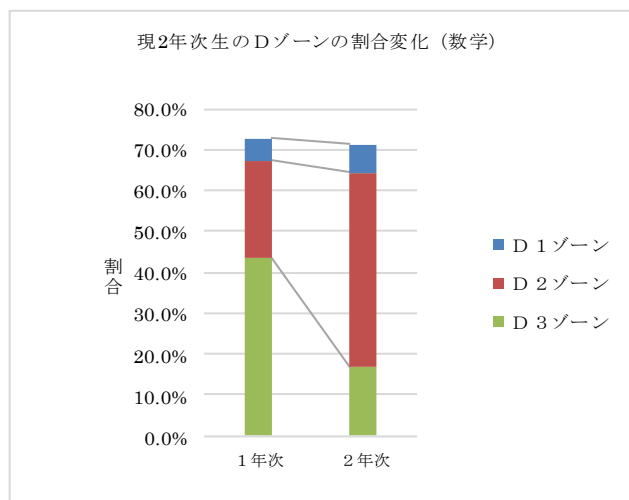
(4) 各種研修

校内研修や外部団体主催の校外研修を積極的に実施し、生徒理解とキャリア教育・基礎学力向上の共通理解を推進した。

- ・「生徒の学習資産を活かした探求型授業デザイン」
岐阜県教育委員会教育研修課に講師を依頼して出前講座を実施し校内研修した。
- ・「キャリア面談から恵那南高校を考える」
キャリアコーディネーターを講師として上記（3）の内容を校内研修した。
- ・「大学入試改革に向けたICT活用研究会」
㈱ベネッセコーポレーション主催の研究会に参加し、後日、㈱ベネッセコーポレーションより講師2名を招いて校内研修した。
- ・「受験生切り替え指導研究会」
㈱ベネッセコーポレーション主催の研究会に参加した。
- ・「高校領域の定着を目指した学び直し指導研究会」
㈱ベネッセコーポレーション主催の研究会に参加した。

6 ベネッセ基礎学力診断テスト結果分析





・考察

平成25年度以降のテスト結果から1年次の基礎力診断では、この3年間ほぼ横這い状態である。特に義務教育段階での基礎学力が身に付いていないとされるDゾーンの割合が高い現状にある。しかし、このデータから、まだまだ平均点の推移ではあまり変化がみられないものの、Dゾーンの分布からDゾーンの中でも一番低いとされるD3ゾーンが減っている調査結果となった。今年度の取り組みが来年度の基礎学力テスト結果につながるのか検証したい。

7 これまでの取組に関しておよび今後の普及について

本校は、選択・習熟度別の授業を展開し、少人数制で生徒一人ひとりの学力に対応してきた。また、生徒の多様化も年々顕著で、国公立や難関大学を目指す生徒がいる一方で低学力や人間関係などの問題を抱えた生徒もいる。学力不振の生徒の多くは何らかの問題を抱えている。そうした問題とも向き合いながら今後取り組んでいかなければならないと考える。

今年度作成したキャリアノートをもとに3年間見通したキャリア教育に活かしながら見直しを図り、常に生徒の実態に合ったノートにしていきたい。

本校は、より一層の進路実現ができる学校になるため多様化した生徒に早く対応し、入学後に高校の学習にスムーズに入り、2年次以降の系列選択に繋げできるように1年次の前期から「ソーシャルスキル」を実施することも検討しなければならない。

外部のキャリアコーディネーターによる面談は、生徒たちは自己を見つめながら、将来の目標設定を考え、それが学習意欲向上に繋げることができたと感じる3年間の取り組みだった。今後もこのキャリアコーディネーターの面談を継続していきたい。

また、本校は平成19年開校以来、「浪漫学園」と称して明智中学校・明智小学校・恵那特別支援学校と連携して学びの協同体を実行してきた。今年度も「明智川のカワゲラウォッチング（水質検査）」、「読み聞かせ」、「星空観察会」、「地域研究」、「合同音楽鑑賞会」などの交流をした。その取り組みとSUCの取り組みが今後連携していくようにしていきたい。